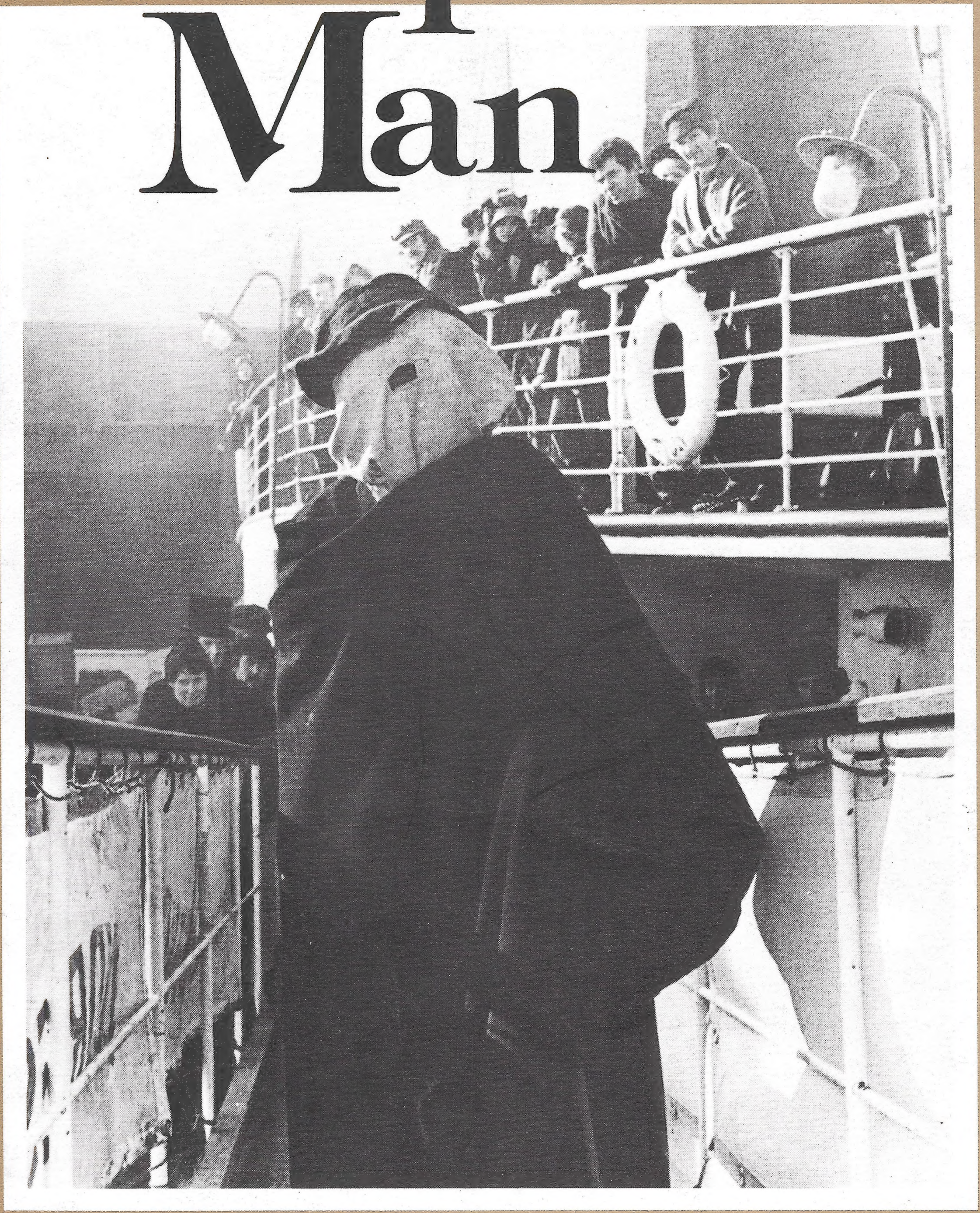
The Elephant Man



エレファント・マン

The Elephant Man



エレファント・マン

全米監督協会選出・優秀監督賞受賞
全米カソリック協議会推薦
'80ゴールデン・アップル賞・男優賞受賞
第３回メディア賞・作品賞受賞
本年度クリストファー青銅賞受賞
第25回コーク映画祭・特別賞受賞
'80フランス・アボリアス映画祭
　グランプリ、批評家特別賞受賞
タイム誌選出ベストテン入選
ピープル誌選出ベストテン入選
ゴールデン・グローブ賞ノミネート
　作品賞・男優主演賞・監督賞・脚色賞
ロサンジェルス映画批評家賞ノミネート
　男優主演賞・撮影賞

東宝東和提供／米英合作

TOWA　EMI

ドルビー・ステレオ

Stereophonic Sound
DOLBY SYSTEM®
Noise Reduction – High Fidelity



解説

世にも稀なる奇型に生まれついた人間をめぐる人間精神の気高さと俗悪さ……。この映画は19世紀末のイギリスに実在し,《エレファント・マン(象人間)》と呼ばれ,蔑視と飢えと好奇にさらされ続けた生涯を送ったひとりの若者をめぐる,真実のドラマである。

《エレファント・マン》の事実がつきつける衝撃と感動はまさに比類なく,全米で公開されるや大ヒットを記録,さらにイギリスでも絶賛のロングランを続けている。また81年度アカデミー賞の最有力候補として作品,監督,主演男優など主要８部門にノミネートされたほか,英アカデミー賞の主要７部門でもノミネートを受けており,すでに各国で数多くの賞も獲得している。

世界の工場として産業と文化に空前の繁栄を誇った19世紀末のイギリス。ロンドン病院の若き優秀な医師フレデリック・トリーブスが見世物小屋で発見したその男こそ,見るもおぞましい奇型人間《エレファント・マン》ことジョン・メリックであった。初めは医学的な研究対象にすぎなかったメリックに,豊かな知性と純粋な精神が輝いていることを知り,以後,メリックとトリーブスとの間に人間どうしの深いふれあいが育ってゆく。

かつて,「奇跡の人」で三重苦の少女ヘレン・ケラーが“水”という一語を知ることによって《動物》から人間へと人格を獲得していったように,エレファント・マンもまた最後には本来の人間性をとり戻してゆく。その魂の進化の過程ともいうべき人間復権の姿がすばらしい。だが,その美しい情景は,胸をしめつける感動とともに,常に一種の危機感と緊張をはらんで,一瞬の油断も観客に許さない。

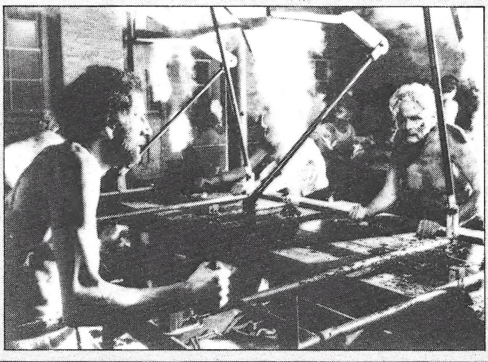
監督は弱冠33歳の新鋭デビッド・リンチ。エレファント・マンに関する史実と資料のいっさいをもとにオリジナル・シナリオを自らクリストファー・デ・ボア,エリック・バーグレンと共同で執筆,エレファント・マンをとりまく人びとと時代を驚くべき精緻さで浮き彫りにしている。

エレファント・マンに挑んで迫真の名演をみせるジョン・ハートをはじめアンソニー・ホプキンス,アン・バンクロフト,サー・ジョン・ギールガッド,デーム・ウェンディ・ヒラーら米英映画演劇界を代表する名優たちの競演がいっそう感銘を奥深いものにしている。

なお,この映画は,舞台その他の劇化とはいっさい関係がない。　(上演時間・２時間４分)






物　語

19世紀の末，イギリスは世界の工場として産業に文化に史上空前の繁栄を迎えていた。

ロンドン病院の優秀な青年外科医フレデリック・トリーブスは猥雑をきわめる見世物小屋で《エレファント・マン（象人間，象男）》と呼ばれる男を初めて目の前にして思わず息を呑んだ。この世にこれほどまでに奇型の生きもの，いや人間がいようとは……。

《エレファント・マン》は本名をジョン・メリックといった。

解剖学に造詣の深いトリーブスは研究したいからといって親方のバイツに交渉し，メリックを秘かに病院に呼び寄せると，最上階にある隔離病棟にかくまった。

トリーブスの学会での研究発表は異常な反響を呼んだ。しかし，メリックの奇型の原因は不明であり，治療も不可能という絶望的状態だった。メリックの推定年齢は21歳であった。

メリックの存在はほどなく院長カー・ゴムの知るところとなり，不治の患者を病院に留めておくことはできないとトリーブスに言い渡した。だが，その前にメリックに会うことは承諾した。

メリックは右腕が不自由で歩行も困難，しかも上唇が異常にめくれあがり，言葉も鮮明に発音できなかった。

物も言えず知能もごく低いと思われていたメリックが聖書を読み詩篇をそらんじているだけでなく，優しく誠実な若者であることを知って院長も深く胸を打たれた。幼少の頃から逆境に生きるしかなかったに違いないメリックのどこにそんな不屈の精神が秘められていたのだろう……。

院長の特別の計らいによってメリックは病院にいられるようになった。いま彼は初めて“家”を得たのだった。

ある日，トリーブスはメリックを自宅へ招いた。トリーブス夫人アンは噂に聞いていた《エレファント・マン》の形相に強い衝撃を受けながらも，メリックを暖かく迎えた。メリックもアンの中に美しく優しかった母のおもかげを見出し，思わず涙にかきくれた。「母は美しい人でした……」誰にも見せたことのない，母の写真を手にしながらたどたどしく，しぼりだすようなメリックのつぶやきにアンは返す言葉もなかった。

院長はタイムズ紙に投書して，メリックの苦境を救うための募金を広く読者に訴えた。メリックの人となりを詳しく紹介することも忘れなかった。

かくして，一躍“有名人”となったメリックのもとにさまざまな階層の人びとが訪ねてきた。有名な舞台女優ケンドール夫人もその一人だったが，一方では，病院の夜警係の男のように，好奇心にかられた人びとを煽って金をせしめ，なぐさみ者にした卑劣漢もいた。そんな折も折，かねて，“金づる”メリックを病院に奪われたと思いこみ恨んでいたバイツは秘かにメリックを連れ出し，ヨーロッパ大陸へ興行に向かった。イギリス国内では当局が《エレファント・マン》の見世物を禁じていたからであった。

興行を続けるあいだも虐待のためにメリックの容態は急激に悪化し，半死半生のまま見捨てらたが，見世物の仲間たちの援助で辛うじて祖国イギリスにたどりつくことができた。

だが，そこでも待ち受けていたのは相も変らぬ人びとの残酷な好奇に満ちた視線だった。群衆につきまとわれ，公衆便所の隅に追いつめられたメリックは思わず絶叫した。

「わたしはにんげんだ！……どうぶつじゃない！……にんげんなんだ……」

メリックの行方を案じていたトリーブスは思いがけない再会を心から喜んだ。

充分な治療によってようやく体力を回復したメリックだったが，しかし病状はさらに悪化し，重態と診断されていた。

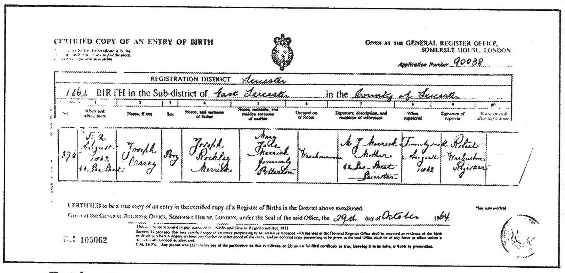
ある夜，メリックはケンドール夫人の好意で観劇のひとときを過した。拍手をもって迎える満場の観客に向かい，トリーブスに促されるまま，ぎこちなく会釈するメリック。

病院に戻ったメリックは，きらびやかで楽しい舞台の興奮がさめやらず，幾度もトリーブスに礼を言うのだった。その夜，ひとりになったメリックはかねてから手がけていた聖フィリップ寺院の模型を完成させ，たどたどしい手つきだが，しっかりとした字で自分の名を書き込んだ。入院以来，朝に夕に病院の窓から見なれていた，ただひとつの景色なのだ。

そして，いつものような，うずくまって眠る姿勢をやめ，ごくふつうの人間がやるように，仰向けになって身を横たえた。だが，それはメリックには致命的な姿勢なのだ。メリックは承知の上であえてそうしたのだろうか……。



実在した“エレファント・マン”と彼をめぐる人々――


CERTIFIED COPY OF AN ENTRY OF BIRTH

GIVEN AT THE GENERAL REGISTER OFFICE, SOMERSET HOUSE, LONDON

Application Number 90038

REGISTRATION DISTRICT Leicester

1862 BIRTH in the Sub-district of East Leicester in the County of Leicester

●ジョン・メリックの出生証明書（1862年レスター）

19世紀末のイギリスに実在した《エレファント・マン》ことジョン・メリックは，数多い見世物の奇型人間のなかでもその異様さにおいてまさに群を抜いていた。イングランド中部レスター出身のこの青年は幼年時代から悲惨な境遇におかれ，ついには《エレファント・マン（象人間）》として大衆に身をさらすことになった。1884年，ロンドン病院の医師サー・フレデリック・トリーブスに発見され，当初は医学上の研究対象だったが，やがて「鋭い感受性とロマンチックな想像力を持っている」（トリーブス）ことが知れるに及んで，ついに人間どうしのふれあいが始まった。メリックの奇型の原因は不明，その治癒は現代医学を以てしても不可能という業病である。1890年死去。トリーブスやロンドン病院院長カー・ゴムらの努力により，1886年病院内に終生住むことを許されてからわずか４年後のことであった。まだ27歳だった。

世にも稀なる奇型のため，メリックについてぼう大な量にのぼる論文・研究レポート，回想録などが著わされたが，その他にも，メリックの遺品や住んでいた部屋なども資料として大切に保存されている。

■マッジ・ケンドール夫人
MRS. MADGE KENDAL
（1848～1935）



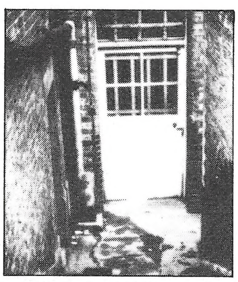
俳優兼マネージャーを父に，劇作家Ｔ・Ｗ・ロバートソンを兄に持つ。４歳でロンドンの舞台にデビュー。のちに名女優エレン・テリー（サー・ジョン・ギールガッドの大伯母）とも共演している。ケンドール夫妻はおしどりコンビとして最高の名声を得た。夫妻はアメリカ公演もたびたび行なっている。1908年引退。1926年デームの称号を受ける。夫人の舞台のすばらしさについては，ある批評家のつぎのことばにいいつくされていよう。「その芸術家としての力量は，あらゆるセリフや身ぶり，動きからうかがわれる。ユーモアも変化も演技の幅広さも身につけている。いちど人の心を打とうと思うと，限りない優しさと真実とを以て観客を圧倒する」。

■サー・フレデリック・トリーブス
SIR FREDERICK TREVES
（1853～1923）



1884年の最初の出会い以来，その最後の日に至るまで《エレファント・マン》ことジョン・メリックと最も深い関わり合いを持ったロンドン病院の優秀な外科医。解剖学に造詣が深かった。ビクトリア女王，アレクサンドラ皇太子妃（のちのエドワード７世王妃），ジョージ５世など歴代の英国王室の特命外科医を勤めたが，エドワード７世の戴冠式の直前に盲腸の手術を執刀して式を予定通り進行させ，その功績により，ナイトの称号を授けられた。著作もよくし，医学関係や牧歌的かつ史的な題材を扱った，優雅端麗な文体の書物を何冊も出している。

ジョン・メリックに関する著書としては，「エレファント・マンとその他の思い出」(THE ELEPHANT MAN AND OTHER REMINISCENCES.1923)があり，今回の映画化に際してシナリオを書く素材となっている。その中にメリックの死を悼んで述べたことばがある。「人間らしさという見本からすれば，メリックはいやしくいとわしいものであった。しかし，メリックの魂は，もし生きた人間の形にしてみれば，すらりとした英雄のごとき人物の風貌をし，はれやかな額と清らかな肢体に不屈の勇気の輝く瞳をもっていたことであろう」


●メリックが最後の４年間を過した部屋の外面（ロンドン病院）


●メリックの使用した帽子とマスク（ロンドン病院）

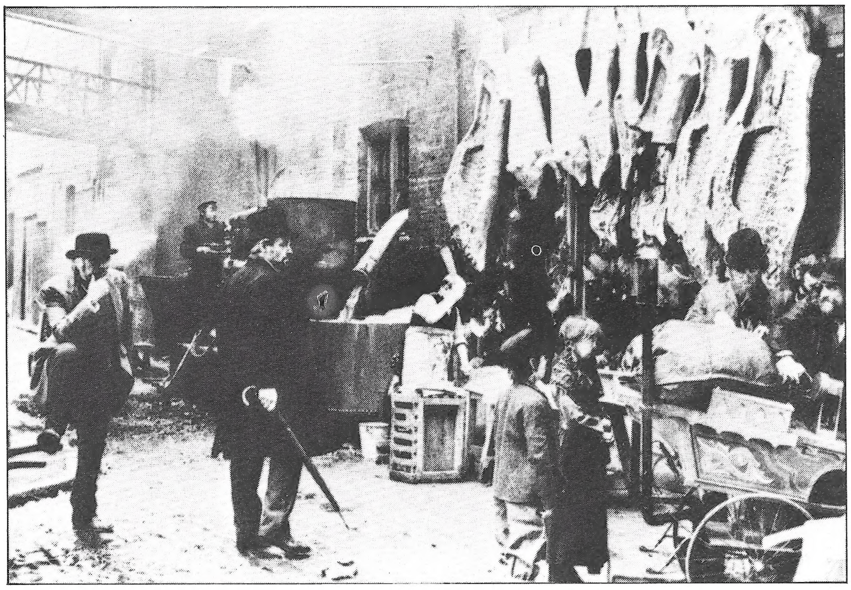

●メリックが使用していたひじかけ椅子（ロンドン病院）


●メリックの作った聖フィリップ寺院の模型（ロンドン病院）



出会いがうみだす結晶

映画評論家
荻　昌弘



おそらく，人類の，長く，幅広い歴史のあいだには，地球の各地，各時代，象男（エレファントマン）にも似た，いやもっと信じ難い異形の人々が，無数に存在した。

しかし，それらほとんどの人々は，肉体が本質的に弱かったか，生産性に乏しく経済的に自立しにくかったか，いや，決定的には，世間からさげすまれ，しいたげられ，嫌われ，怖れられ，拒まれて，拒絶と疎外のうちに，表層へ出ることなく〝裏側で〟抹殺されてしまった。つまり，彼らは，人生でいちども，「孤独」以外のシチュエイションを獲得できなかった。

19世紀末，ビクトリア朝ロンドンに〝実在〟したエレファント・マンこと，ジョン・メリックの場合は，短い人生（27才で夭折した）の晩年期（はたち代の，性機能には障害もない青年だった），ロンドン病院の外科医フレデリック・トリーブスと「出会う」という，劇的な体験を得た。外科医がたまたま場末の見世物小屋で象男（エレファントマン）のポスターを見，学術的好奇心にとらわれる，そういう〝一瞬〟を持ったために，メリックは己れの存在をイギリス中に知られる運命になった。だけではなく，その存在の〝知名度〟は，死後，巨大に増殖するいっぽうで……

1923年，トリーブスによる回想録「エレファント・マンとその他の思い出（レミニスンス）」の発表

1973年，アシュレイ・モンタギューによるドキュメント「エレファント・マン――人間の威厳（ディグニティ）に関する一研究」の刊行

1977年，バーナード・ポメランス作の舞台劇「エレファント・マン」の上演。日本では80年，「劇団四季」が公演。

1980年，ブルックスフィルムスによる映画「エレファント・マン」公開

と，一世紀の間に，〝ロンドンの象男〟の情報は，いわば汎地球的規模で拡大をつづけ，彼を「超有名人」におしあげた。

メリックとトリーブスのこの一瞬の出会いは，たまたまの偶然，にみえる。じつはそうではなかった。ひとりの極度の障害者が，その個有名詞を一世紀後の今日の世界にのこす，には，やはり歴史的地域的必然，がどうしても必要だった。つまり，19世紀末ロンドン，という条件が。医学や自然科学は，絶大な自信をもって近代性の本質にめざめ，絢爛たる発明，発見をくりひろげた時代。また，とどまることなく成長してゆく産業資本主義は，同時にさまざまの矛盾も吐きだし，そこから弱者救済の福祉思想もうまれて，たとえば国際赤十字がひとつの理想主義への歩みを開始した時代――そのような時代，世界（といっても欧米だけだが）の首都であるロンドンで，少壮の外科医が一人の異形者と出会う可能性は，むしろ，高すぎるほど高かった。あえて，乱暴にたとえるなら，「日英同盟」(1902年)にすら，それがなかったとはいいきれないのである。「救いのないところに救いを！文化果つるところに文化を……」

×

映画は，前述したトリーブスとモンタギウの資料を基礎に成立したが，この芝居とは，まったく無関係である。しかし，この映画の成立は，これはこれでまた一つの興味つきない「出会い」のドラマであった。

モンタギウの研究が刊行されたのは77年だが，早速それを読んで異様な感銘を受けたカリフォルニアの一下宿の女主人がいた。彼女は26才の下宿人クリス・デ・ボアに熱心に一読をすすめる。読んで，信じ難いドラマをそこにみつけた彼は，親友のエリック・ベルグレンにも読ませ，二人は，これがどえらい映画になることを確信してロンドンへ飛ぶ。モンタギウから脚色の許しをとりつけるために。カリフォルニアへ戻った二青年は，ビール会社でタンク洗いのバイトをしながらシナリオを書きあげる。それを，製作者ジョナサン・サンガーの許へ持込んだのは，サンガーの許に居候みたいに住んでた，じつはクリスのガールフレンドだった。――サンガーを通してこの脚本に触れることになるのが，あの怪喜劇のメル・ブルックスである。映画は彼のブルックスフィルムス（英国）で製作，と決り，そしてこのプロダクションへ監督として呼び寄せられたのが，かねて，メル・ブルックスが「消去（イレイサー）ヘッド」という習作一本だけで才能を見ぬいていた無名映画人，デイビッド・リンチだった。

×

こうして出来上っていった映画，これが展開する内容も，また，「出会い」である。

トリーブスが象男を〝発見〟し，ロンドン病院へ引き入れた結果，以降，じつにさまざまなイギリス人（とくに上流人，知識層）が，そこまでの，見世物小屋の見物人とはちがったアプローチで，この異形人に出会う。最初は，ぜんぶ，或る意味でエゴイスティック――少くとも自分

中心の出会い方である。外科医は，医学的好奇心と学術的功名心にかられている。院長は，プラス・マイナス双方から，象男を「世間」がどう見，それが病院へどうはね返るか，を計量している。ケンドール夫人は，まずこの異形人に美女の象徴と認められたことが得意だ。しかも彼への本能的嫌悪感を，どう己れの演技力や，慈善意識で克服してみせるか，に挑戦している。

しかし，「出会い」とは，そこから双方の内部の何かが大きく変えられてゆく，だからこその出会いなのだ。

この場合も，周囲の諸人物は否も応なく象男によって己自身を変えられる。象男もまた，彼らに出会い「世間」へひきだされたことで，見世物小屋の裏で孤独だった頃とは人間の本質じたいを取りかえられてしまう。この映画が，極度に厚く重い人間的感銘をつたえてくるのは，その，双方の変化が，ふたつながら，みごとな立体性と鮮明度で表現されているからである。

なかでもトリーブスは，象男との接触を深めるにつれ，医学対象としてのこの「神経繊維症（ニューロフィブロマトシス）」患者の新奇性よりも，このうちひしがれて生きのびてきた21才の若者の，純粋な透明感に衝撃をうける。それがこの医師を，象男の無二の親友，保護者にさせる，だけではない，人間のしあわせとは何であるのか，を根本で理解できる男性へ変える。トリーブスはあとで繰返し，象男メリックが，高度の知性や純粋な判断力，優雅な情念や繊細な想像力の持主であることを，世間へ力説する。――じつは，トリーブスに象男がそう映じるようになった，とは，逆に，象男の磁力に照らし返されたトリーブス自身，そういう諸特性をそなえた人間へ深まった，ことに他ならない。私たちは，最もシンプルな存在に出会ったときに，自分はいったい，このピュアな単純さに恥じもなく向き合える人間なのか，という自問を強いられる。この自問のつみ重ねこそが，人間を深化させてゆく，鎚なのである。

いっぽう，ケンドール夫人は，最後まで，ブルジョワの枠内での慈善意識から，解放されない女性だった。彼女はチャリティ興行で象男を桟敷席へ案内し，彼に起立を求めて，満場の拍手喝采をうながす。鼻持ちならぬ勝者の優越心がその底に渦巻いている。象男にとっては，ふつうの人からふつうに扱われることこそ本意なのに。凱旋将軍のような特別扱いをされることは，彼にはそれこそ逆差別にほかならない。

もちろん，象男エリック自身は，当然，そのことを知っている。あらゆる屈辱という屈辱を味わされてきた人が，慈善の偽善性と，ほんとうの「平等の親切」とを，見分けきれないわけがない。

しかし，この映画の最も感銘深いところは，本物とニセとを見抜いてるこの象男が，すべてを受入れ，すべてに感謝し，ブルジョワたちに見せてもらった音楽劇（ジョルジュ・メリエス映画のイメージにそっくりであるのが私たちには興味深い）の夢幻感に恍惚と陶酔しつつ，人生のすべてを体験しおえた充足感で，永遠の眠り，いや，昇天の座につく，そこをラストとしていることである。彼はそのいまわの時，“It's finished.”と一言つぶやく。勿論，病院で作りつづけてきた聖パトリック寺院（これも彼には天への昂揚のシンボルだった）の模型が，やっと完成した，これは納得である。しかし，同時にそれは，この男が今，他人から与えられたすべて，意地悪るも，暴力も，好奇の眼も，見当外れのおためごかしも親切も，ついに一生，抱擁には来てくれなかった女性という生きものの行動も，すべてを神の思召しとして納得し終えた，そのうなずきでもある。他人から与えられるもの全部を許し，感謝することができるようになれた，その透明な浄福感に達したことで，象男エリックもまた，ひとに「出会った」ことで変れたのである。

×

こういう，「出会い」の相互の変化までを，これほど立体的・重層的に描きだせる監督が，33才の，しかも劇長篇未経験者とは，眼を疑うような新事実である。しかし日本でも，長篇初演出の小栗康平監督が，心にしみ通る傑作「泥の河」を産みだす時代なのだ。

デイビッド・リンチ監督の演出でおどろかされるのは（じつは小栗監督も同じだが）どこまでも正面きった正攻法の映像づくりにみせる，自信のゆるぎなさである。院内や駅頭で心ない群衆（群衆はいつも，心ないが）が象男にのしかかってくる暴力の激しさから，同じ見世物仲間が彼をかばう詩情の抒情性まで。この演出は，なに一つ奇をてらったところがない，どこ一つ，まじめであることにわるびれたところがない。絢爛たる奇手こそがユニークな個性の証明，とされかねない今日，日米の二新人が，ここまで体内に蓄積してきたこの映画能のタチのよさ，彼らの映像が示す静かでまっとうな安定度は，今だからこそ極度に大きな注目で検討されなければならない。

それにしても，若い未経験のリンチ監督を，こんなにも堂々とデビューさせたのは，何か。いうまでもない，彼を助け支えた周囲の集団意志の，目を見はる高度な能力と，この主題へのかけねない献心だった。

とくに演技陣の充実感は，鮮明な名演をみせるバンクロフトやギルガッドだけではない，それこそ，見世物の口上師から，弥次馬の末端にまで充満しているのが重大である。なかでも，ジョン・ハートが袋の仮面の下で演じきってみせた象男の崇高感。あらゆる暴力には完全に無抵抗な弱者だが，じつは無抵抗に生きていることじたいが最大の抵抗である強者を，ハントは，何もしないでそこに在る，その精妙な存在感で造型してしまっている。これは，日本の「能」である。

このプロダクションが集合させおえたスタッフの優秀性も，また，身ぶるいが出るほどだといっていい。特に私は，フレディ・フランシスの黒白映像が，あの，今も記憶にのこる名撮影「息子と恋人」よりも，さらにリアリズムの鑿（のみ）の刃をとぎすませ，情緒にぬれない地点で足を踏みこたえて，19世紀末イギリスの光と影を，じっくり，彫り深いヒダの陰影へ甦えらせたことに，驚嘆する。

これと並んで，耳を疑う驚きにうたれるのは，この作品が音響効果（アラン・スプレット）につらぬき通したリアリズムの卓越性である。私はこれほどしたたかで精妙なハイフィディリティ録音を，ほとんど映画に聴いてこなかった。が，それよりも，サウンドトラックにこめられたその音一つ一つが，かぎりない想像力をわれわれに起させることで，むしろ絵以上に世紀末ロンドンの現実を造型してしまっている，そのイメージ喚起力こそ未体験のものだった，といいたい。

×

邦画の秀篇ドキュメンタリー「マザー・テレサとその世界」で，カルカッタの街から瀕死の行き倒れ人を収容し，末期のきわでも，生きるための注射を打ってやるマザーは語っておられる。「私たちは，あらゆる人が，自分は他人や世間から，祝福され，認められてこの世にいたのだ，と納得しながら，天へ昇れるようにしたいのです」。――そしてマザーは，「自分は，この世でいちばん醜く，みじめで，むごたらしい人を愛せるのだろうか？」と自らへ問いかけつつ，他人が目をそむける病者の患部を，素手でさすってやるのだ。

映画「エレファント・マン」。これは，そのマザー・テレサが出会われても，映画として恥じのない，人間の誓い，なのではあるまいか。









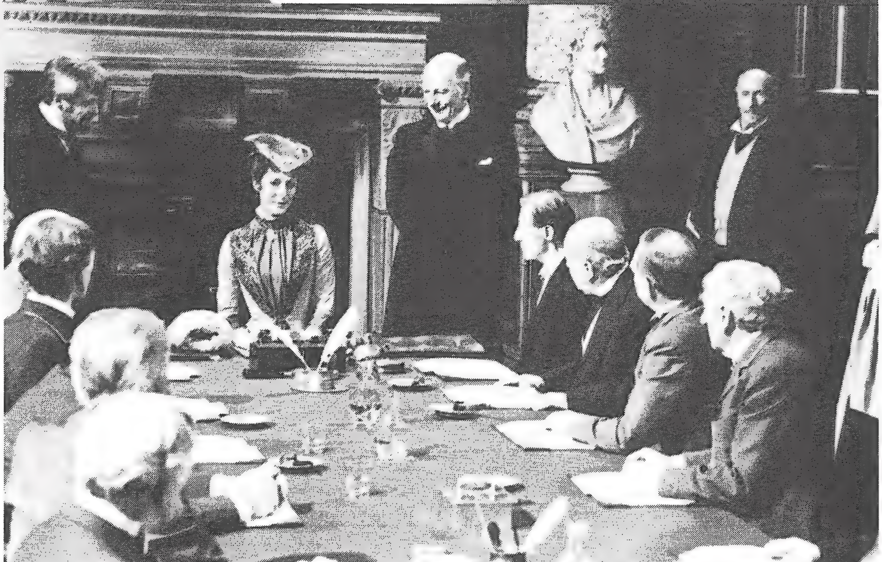




「真実」は—語りつくせ







ないドラマを生んだ。

見る側の心が逆に照射されてくる

映画評論家
小藤田千栄子



試写会でもらったこの映画の資料には「舞台その他の劇化とは，いっさい関係がない」と記され，またアメリカでは新聞広告に，ブロードウェイの舞台とは関係ないとあったそうだけれど，あの感銘深い舞台版「エレファント・マン」を見たあとでは，演劇と映画，ふたつのメディアを，頭の中で並べてみてしまうのは致しかたないことだろう。劇団四季が昨秋，日生劇場で上演した「エレファント・マン」は，極端な言いかたをすれば，まさしくアイディアの勝利ともいえる作品であった。オープニング，舞台にはスクリーンが下りてきて，そこに実在のエレファント・マン＝ジョン・メリックの写真が何点か映写される。ああ，こういう人だったのかと，私たち観客は，その姿形を頭にきざみこみ，やがて素顔の二枚目さんが，身体をよじる程度の動きで演じる，この主人公を見るのであった。見ている間じゅう，私たちは，二枚目さんの姿に，写真でみたジョン・メリックを重ねあわせ，常に想像力を喚起されながら，精神的には，観客参加とも言える演劇を体験したのであった。

こんなにも抜群のアイディアをもった，まさしく演劇の勝利とも言える作品を見てしまったあと，こんどは同じ素材が映画になったときいて，実のところ非常に驚いたものである。そんなことが，はたして可能なのかとも思ったものである。まさか映画では，実在の人物の写真だけを見せて，それですませるわけにはいくまい。映画は，メディアの本質としてリアリズムなのだ。となると，いったいどういうことに？　後発とはいえ，これだけの素材に取り組むのだから，それなりの自信はあったろうし，それに海外での賛辞も，すでに知ってはいたのだが，や

はり映画は，自分で見てみなければ，わからないものなのである。

映画は，意味あり気なイメージ・ショットから始まった。女性の眼のアップ。ついで画面を横切る象の群れ。それに女性の顔がオーバー・ラップして，なにやらキワモノふうである。やがて，このショットは，見せ物小屋の主人の口上につながってくるわけだが，いま考えても，このイメージ・ショットが必要であったかどうか，私には疑問だ。「地図にも載ってないアフリカの島で，妊娠四ヵ月のとき象に襲われ……」という口上は，あくまでも見せ物小屋の口上にすぎないからである。日本でも，その昔よくあった“親の因果が子に報い……”という，あの，おなじみの口上と同種のものだからである。医学的には，その原因が証明されていないのに，あまりに思わせぶりなショットでありすぎるような気がする。だが映画は，こんな因果者的な扱いをしながらも，前半は，主人公の見せ方において，まるでサスペンス・スリラーのような魅力さえ持っている。映画のリアリズムは，いつかエレファント・マンその人を，ずばり見せなくてはならないのだ。だが問題は，見せ方の，その段取りである。実にうまかったと思う。見せ物小屋で，外科医のトリーヴスが，初めて会うときは，薄暗がりの中で，ぼんやりとしか見えず，病院では白い頭布に手をかけるところで画面が変わり，学会ではカーテン越しにシルエットで見せる凝った段取りである。二度目に病院に来て，入院がきまったときは，理事長の目にとまり，食事を持っていった看護婦が悲鳴をあげ，それでもまだ私たちは，エレファント・マンその人を，はっきりと見ることは出来ない。フィルムに彼が定着されるのは，このあと，看護婦の悲鳴に，外科医があわてて部屋にとびこんできたときだ。ベッドにすわって，こちらを見ているジョン・メリック。ほぼ30分を経過しての登場である。ずいぶんと考えた構成なのだろうが，この間，私たちは，彼が頭布をとったら，どんなふうなのだろうと，ずっと考えている。この，いわば想像力の刺激は，舞台のアイディアと似ているが，エレファント・マンその人を，すぐにも見せそうで，その実なかなか見せないで引っぱっていく力は，たいしたものである。新人監督デヴィッド・リンチの，技量のほどの証明とも言えるであろう。

主人公が，その姿をはっきりと見せてからは，反応は二つに分けられる。まず正直に驚き，あるいは，むきだしにして無礼な関心をよせる人たち。そして，もうひとつは彼に，やはり関心をよせる上流階級の人たちだ。前者の，まず正直に驚いてしまう人たちの，そのあからさまな描写に，私は好意をもった。お皿を取り落し，悲鳴をあげてしまう看護婦さんも，あるいは大陸からロンドンに帰り着いたとき，思わず後をつけてしまう子供たちも，トイレに追いつめてしまう大人の男たちも。この人たちの驚きは，よくわかるし，もし仮りに作者が，批判などしたら，かえってウソっぽくなってしまっただろう。病院のボイラーマンの案内で，主人公を見に来る人たちは，これは実にイヤな感じだった。おそらく彼らは，階級社会イギリスの，その底辺近くにいる人たちであろうが，そんな彼らが，自分たちより，さらに下の人として主人公を見ている，その正直さはわかったとしても，実にイヤな感じだった。ただし彼らが大挙して病室に押し入り，主人公をいじめつくすくだりの演出はすごかったと思う。

問題は，上流階級の人たちである。アン・バンクロフト扮するケンドール夫人が病室を訪れ「ロミオとジュリエット」の台詞をやりとりするくだりは見事なものだし，口づけをして「あなたはエレファント・マンなんかじゃないわ。あなたはロミオよ」というくだりは感動的でさえあったと思う。そして，劇場に行ってみたいという主人公に「ぜひいらっしゃい。劇場はロマンスです」なんて言うくだりも。だが，ケンドール夫人の訪問のあと，病院には次々と貴族たちが訪れ，皇太子妃さえ味方について，ジョン・メリックは，ヴィクトリアン上流社会の格好の慈善の対象となっていく。このあたりになると，彼も紳士然とし，「マイ・フェア・レディ」の名台詞「花売り娘とレディの違いは，どう振る舞うかではなく，どう扱われるかということにあるのです」なんてのが思い出されるのだが，同時に外科医の新しい悩みが出てくる。見せ物小屋から病院に場所を変えただけで，彼が見せ物であることに変わりはないのではないかと。この，彼の悩みは，問題提起として，そのまま観客に，つきつけられる。それは，ケンドール夫人をも含めた上流階級の人たちの関心や反応が，はたして本当に心の底から出たものなのかどうかということ。もしかしたらそれは偽善ではなかったのかという疑問。映画は，外科医の奥さんの反応や，あるいはサーカスの小人たちの行動をも含めて，なんら主張していないように見える。映画も，そして作り手たちも，はっきりとしたことは，なにも言っていないようにみえる。ということは，見る側が，どう受けとるかということに，すべてがかかってくるわけである。偽善なのか否なのか，見る側の心が，逆に照射されてくる，そんな作品なのである。私は，主人公が劇場の桟敷で手をふるラスト近くのシーンで，見せ物であることを越え，映画の勝利を感じたのだが，はたしてどうなのであろう。

この映画は，戯曲同様に外科医トリーヴスの記録を原作としているが，その抜すいを，劇団四季のプログラムで読むと，かなりの部分，映画的な盛りあがりを計算に入れて脚色していることがわかる。念のため，ジョン・メリックが初めて劇場に行ったときのくだりは，以下のようになっている。「メリックは，窓にブラインドをおろした馬車で劇場へつれて行かれ，王室用の入口から入って，特別の階段を通ってボックス席まで行くことを許された。私は病院の主任看護婦三人にたのみこんで，夜会服を着てボックス席の前列に坐ってもらった。これはひとつには，ボックス席の飾りとしてであったが，もうひとつの目的は，メリックをかくすためであった」



JOHN HURT
ジョン・ハート

さまざまな役柄を演じるのが俳優の職務だが，こんどのような体験は空前といえよう。プロデュサー，監督，脚本家の三者が一致して主役に選んだというエピソードは，守備範囲の広さと確かな演技力を物語っており，期待に応えた迫真の名演は映画史の輝かしい１ページとなるに違いない。

1940年1月23日，イングランド中部にあるダービーシャーに生まれた。父が牧師，母がエンジニア，兄が司祭，姉が教師という物堅い家庭に育つ。16歳のときに俳優宣言，だが現実は美術方面へ。その後，ＲＡＤＡ（王立演劇アカデミー）の奨学生に応募，演劇界に身を投じることになった。俳優としてのデビューは1962年。それ以後，映画，舞台，ＴＶに出演を重ね，有望な新人からオールウンドな実力を持つ名優の地位を獲得した。「ミッドナイト・エクスプレス」(79)でアカデミー賞にノミネートされた。主な作品に「エイリアン」(80)がある。ロンドン郊外に在住。



ANTHONY HOPKINS
アンソニー・ホプキンス

医者として人間として良心の問題と直面するロンドン病院の若き俊秀，その苦悩はスクリーンをつらぬいて観客と一体化する。「この映画に出られなければ意味がない」この映画に注ぐ情熱の深さが知られよう。

1937年，南ウェールズに生まれる。17歳のときにカーディフ演劇音楽学校に入り，ついで砲兵隊で２年，義務兵役を勤めた。60年に，舞台監督助手としてスタートしたがその後王立演劇アカデミーに２年間学ぶ。65年から67年まで国立劇場に所属，オリビエの代役を勤めるなどめきめきと頭角を現わす。

68年の「冬のライオン」で映画デビュー。70年に国立劇場に復帰したのち，ＴＶにも活躍の場を広げ，わが国でも放映されて話題を集めた長時間ドラマ「ＱＢ７」に主演した。74年，ブロードウェイの舞台に立ったのち，ハリウッドに移って映画出演を続けた。主な作品には「遠すぎた橋」(77)「マジック」(78)などがある。



ANNE BANCROFT
アン・バンクロフト

配役が決まるずっと以前，この脚本を読んだ彼女は「ケンドール夫人の役に私を考えて下さい」とプロデューサーに頼んだ。その熱意はそのまま画面から伝わってくるようだ。1931年ニューヨークに生まれる。アメリカ演劇アカデミーに学び，51年の「ノックは無用」で映画デビュー。やがて「奇跡の人」の舞台ではトニー賞，そして映画では62年度アカデミー主演女優賞を獲得した。また68年の「卒業」，79年の「愛と喝采の日々」でもオスカーにノミネートされるなど，屈指の名女優として貴重な存在だ。なお，メル・ブルックス監督の夫人でもある。





SIR JOHN GIELGUD
サー・ジョン・ギールガッド

威厳の奥に思いやりを秘めているロンドン病院の院長。半世紀を超えるキャリアの中でも，こんどのようなテーマは初めてだろう。

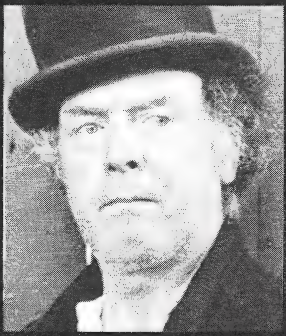
1904年，ロンドンに生まれる。母方の家系は代々有名な俳優一家だった。両親の期待とは裏腹に俳優を天職に選ぶ。王立演劇アカデミーを優秀な成績で終えると，未来の秀れたシェークスピア役者はつぎつぎと名舞台をものにし，なかでも「ハムレット」は絶品と謳われた。舞台が主戦場であるが，映画でも重厚な演技をみせ，「リチャード三世」(53)「ベケット」(63)「オリエント急行殺人事件」(74)「プロビデンス」(78)などがある。



DAME WENDY HILLER
デーム・ウェンディ・ヒラー

毅然たる識見と献身的な看護を続ける人望厚い婦長にだれもが全幅の信頼を寄せるだろう。

マンチェスター・レパートリー劇団の研究生からスタートし，ロンドンのウェスト・エンドからニューヨークとブロードウェイに進出して大成功を収めた。バーナード・ショーが自作の「聖ジョーン」「ピグマリオン」に出演を依頼したほどの実力の持主でもある。舞台での精力的な活躍を続ける一方で「旅路」(58・アカデミー賞受賞),「わが命つきるとも」(66)「オリエント急行殺人事件」(74)などの映画にも出演。73年，デームの称号を得た。



FREDDIE JONES
フレディ・ジョーンズ

《エレファント・マン》を動物以下に扱かいながら，工合が悪くなると狼狽してしまう興行師バイツ。しかし，見世物としてさらす人物と，観衆との間にどれほどの差があるというのか。バイツの存在はあまりにも苦々しい。

ローズ・ブルフォード・カレッジで演劇を学んだのち，レパートリー劇場で修業を積み，王立シェークスピア劇団に参加。実力が認められるにつれてＴＶでも主役を数多くこなし，モンテカルロ・フェスティバルでは最優秀男優賞に輝いた。映画では「できごと」(66)「遙か群衆を離れて」(67)「アントニーとクレオパトラ」(71)などがある。





CAST

John Merrick	JOHN HURT
Frederick Treves	ANTHONY HOPKINS
Mrs. Kendal	ANNE BANCROFT
Carr Gomm	SIR JOHN GIELGUD
Mothershead	DAME WENDY HILLER
Bytes	FREDDIE JONES
Night Porter	MICHAEL ELPHICK

キャスト

ジョン・メリック	ジョン・ハート
トリーブス	アンソニー・ホプキンス
ケンドール夫人	アン・バンクロフト
カー・ゴム院長	サー・ジョン・ギールガット
婦長	デーム・ウェンディ・ヒラー
バイツ	フレディ・ジョーンズ
夜警	マイケル・エルフィック







DAVID LYNCH
監督/デビッド・リンチ



「スターウォーズ」のジョージ・ルーカス,「ジョーズ」のスティーブン・スピルバーグの世代はここにもう一人，新鋭の映画作家を仲間にした。監督第１回作でアカデミー賞にノミネートされたのだから只者ではない。

モンタナ州に生まれ首都ワシントンのコーコラン芸術学校，ボストン博物館付属学校に学び，その後ペンシルバニア美術アカデミーに移る。ここではアメリカ映画研究所から独立映画製作者助成金を受け，16ミリ映画の「祖母」を作った。その結果70年に，ロサンジェルスの高等映画研究センターに入った。製作５年，モノクロ・35ミリの「イレーザーヘッド」は，77年に完成したが，過去３年にわたり，批評家や評論家はこの祭儀をテーマにした代表的傑作を熱心に論じ合った。プロデューサーのジョナサン・サンガーは「イレーザーヘッド」に深い感銘を受け，ただちに「エレファント・マン」の監督を依頼したのであった。陰影に富んだモノクロの画面を採用し，音響をさながら音楽のごとく駆使して，19世紀末の英国の文明の光と影を，鮮やかに対比させた才能はやはり非凡である。「悪夢にもなりかねなかったが，すべてが順調に進んだ」という述懐は苦労をしのばせる。

JONATHAN SANGER
製作/ジョナサン・サンガー

社会の除け者に関心を寄せ，屈辱の人生から人間の尊厳をかち取ってゆく人びとの不撓不屈に共感を抱くからこそ,「エレファント・マン」を迷うことなく選んだのだという。

1960年代の中頃，映画学校を卒業すると72年までの４年間にわたり，南米でドキュメンタリー映画にたずさわった。73年，助監督として長篇映画の製作を手がけるようになる。当時一緒にいた監督には，ポール・マザースキー，ウイリアム・フリードキン，メル・ブルックスらがいる。

78年,「エレファント・マン」のシナリオを買い取ったが，同じ頃これを読んで深い感銘を受けたメル・ブルックスと協力し，製作にふみきったのである。そのシナリオを書いたクリストファー・デーボアとエリック・バーグレンは《エレファント・マン》ジョン・メリックの生涯と苦悩を記述した医師フレデリック・トリーブスの実録に感動したのだったが，映画化に当ってリンチも加わり，シナリオを執筆した。

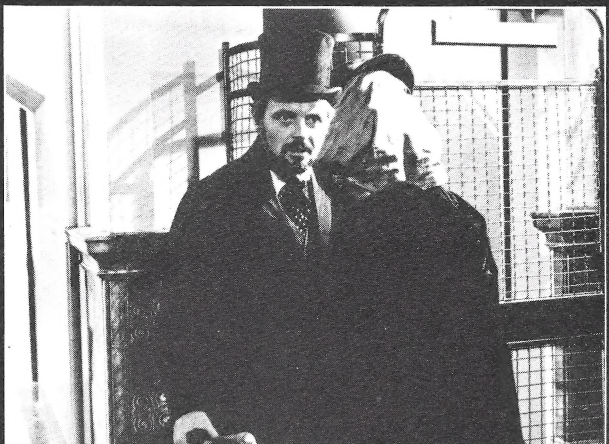
FREDDIE FRANCIS
撮影/フレディ・フランシス

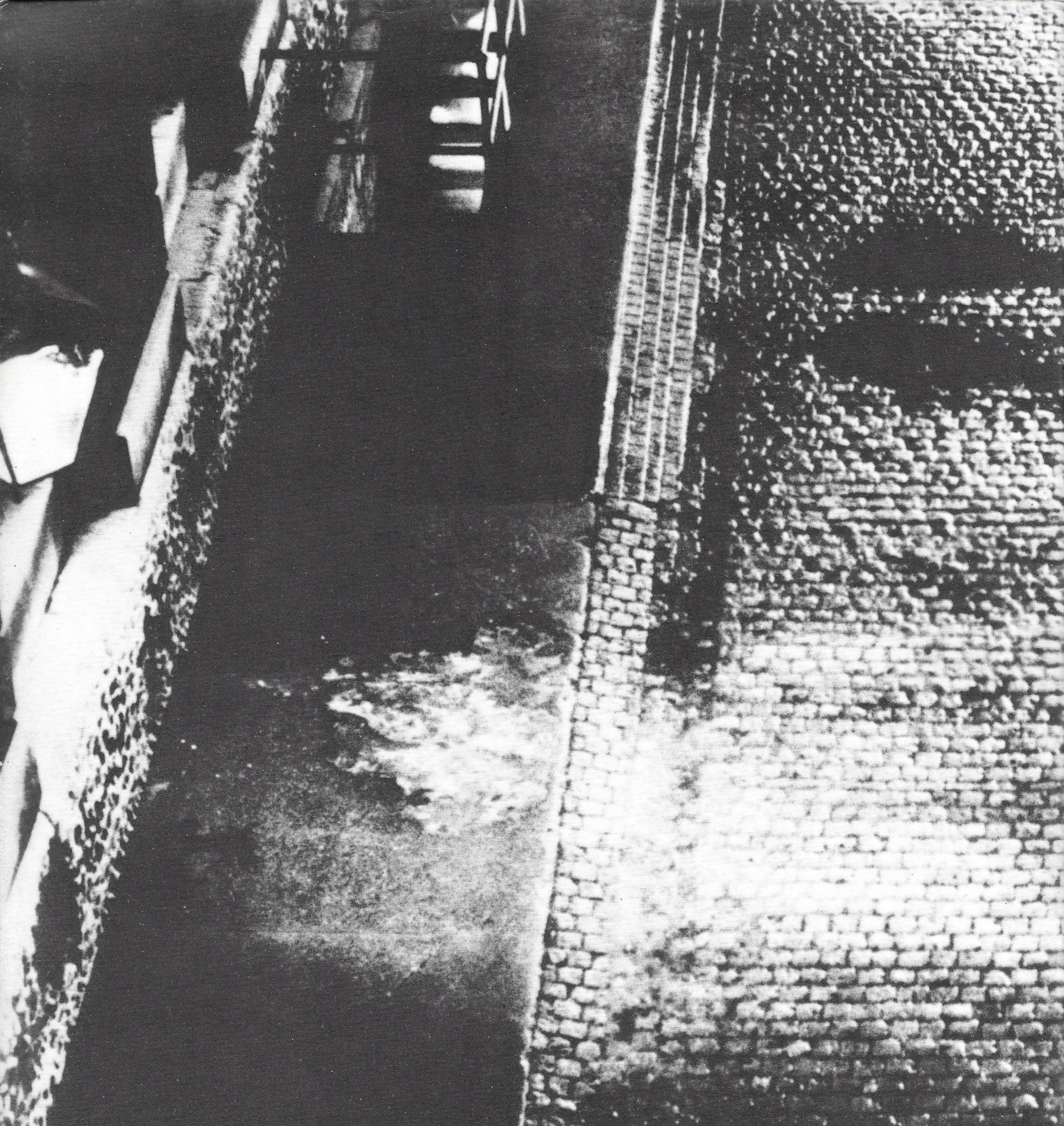
緻密に計算された構図や重厚な画面は，さすがスチール・カメラマンからたたきあげられてきた経験のなせる技といえよう。最初の大仕事は56年の「白鯨」で特殊効果の責任者であるが，本人は最大の失敗と今でも思っているということだ。しかし60年に作られた「息子と恋人」ではアカデミー撮影賞を獲得。そのときまさにイギリス映画が，リアリズムへの最初の試みで世界に衝撃を与えていた時であった。また監督としても定評を得ているが，この「エレファント・マン」の撮影担当を機会に改めてカメラ一筋に打ち込む決意を固めた。

JOHN MORRIS
作曲/ジョン・モリス

もの悲しくも力強い旋律は，見事に映像に溶け込み，作品をよりいっそう盛りあげて心の中にまで浸み透ってくる。これまではメル・ブルックス監督作品のほとんどを担当しているが，日本ではまだなじみが薄い。しかしその実力はアカデミー賞にノミネートされたとうり，卓越した才能はアメリカ，イギリスでは高い評価を受けている。メル・ブルックスとの交遊関係から，ジーン・ワイルダーの「新シャーロック・ホームズ／おかしな弟の大冒険」(77)をも手がけ，さらにテレビ・シリーズからニューヨークでの演劇の作曲に至るまで幅広い活躍をしている。





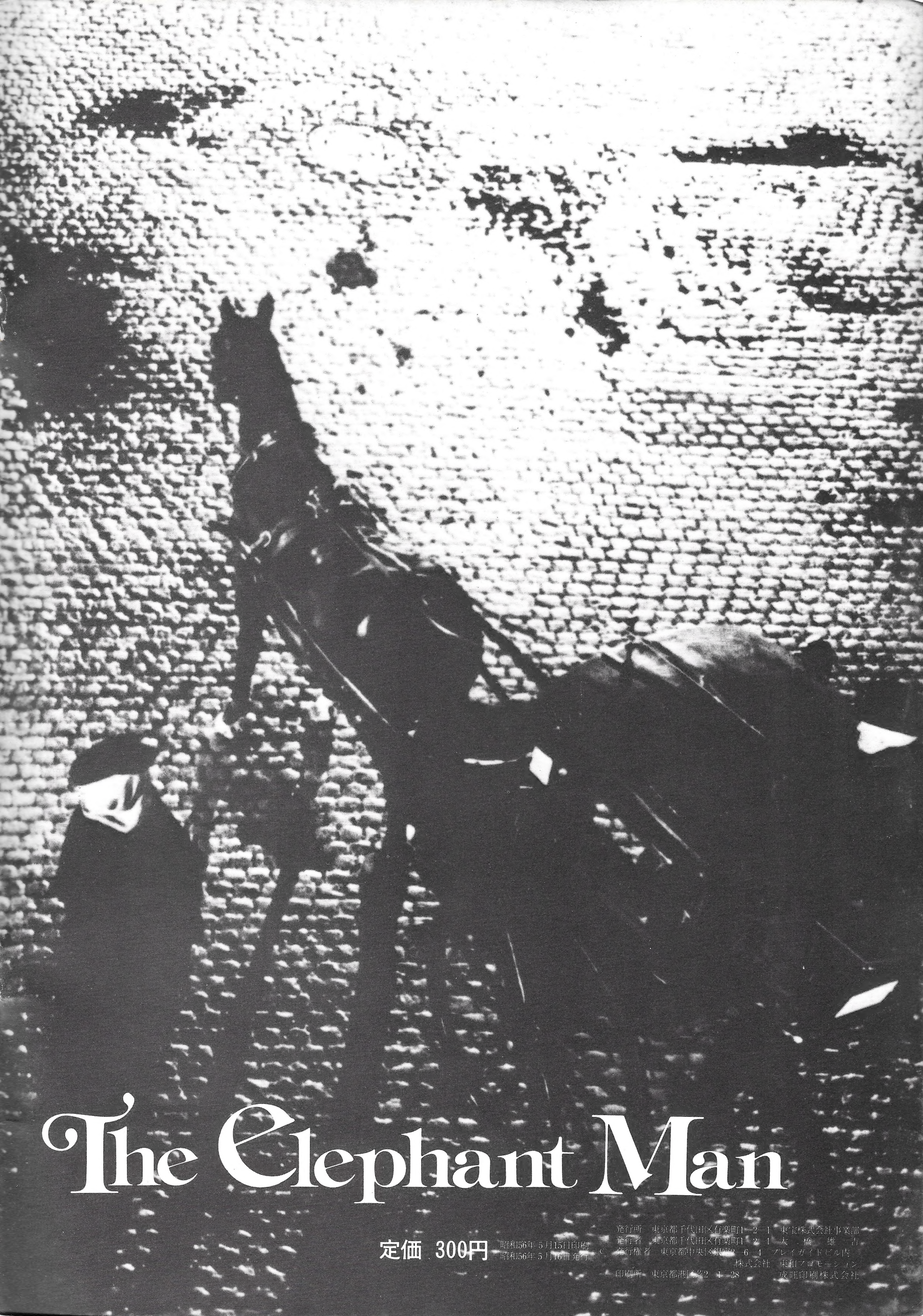


STAFF

Director	DAVID LYNCH
Producer	JONATHAN SANGER
Written by	CHRISTOPHER De VORE ERIC BERGREN DAVID LYNCH
Music by	JOHN MORRIS
Driector of Photography	FREDDIE FRANCIS
Production Designer	STUART CRAIG
Costume Dasigner	PATRICIA NORRIS
Editor	ANNE V COATES

スタッフ

監　督	デビッド・リンチ
製　作	ジョナサン・サンガー
脚　色	クリストファー・デ・ボア エリック・バーグレン デビッド・リンチ
音　楽	ジョン・モリス
撮　影	フレディ・フランシス
美　術	スチュアート・クレイグ
衣　裳	パトリシア・ノリス
編　集	アン・V・コーツ



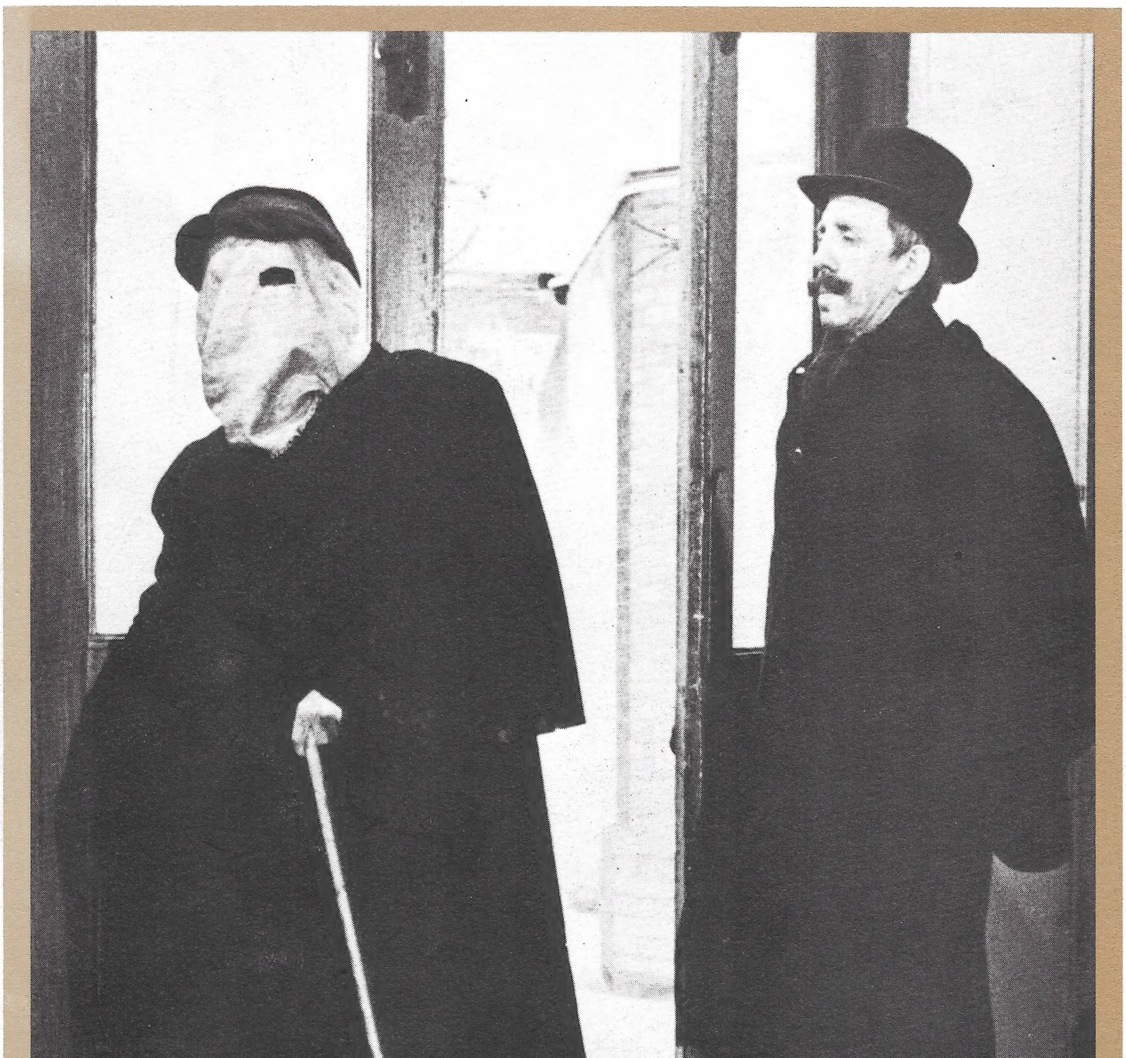
The Elephant Man

定価 300円

昭和56年5月15日印刷
昭和56年5月16日発行

発行所 東京都千代田区有楽町1-2-1 東宝株式会社事業部
発行者 東京都千代田区有楽町1-2-1 太橋雄吉
© 発行権者 東京都中央区銀座2-6-4 プレイガイドビル内
株式会社 東和プロモーション
印刷所 東京都港区[illegible]2-4-28 成旺印刷株式会社

The Elephant Man



TOWA 東宝